

「悪霊に取りつかれた男のいやし」

2015年05月13日

ルカによる福音書 4章31節～37節。イエスはガリラヤの町カファルナウムに下って、安息日には人々を教えておられた。人々はその教えに非常に驚いた。その言葉には権威があったからである。ところが会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、大声で叫んだ。「ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。人々は皆驚いて、互いに言った。「この言葉はいったい何だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは。」こうして、イエスのうわさは、辺り一帯に広まった。

主イエスはガリラヤの町カファルナウムに行き、安息日の礼拝で教えられた。教えを聞いた人々は権威ある言葉に感銘を受けた。礼拝ではファリサイ派の人々によって律法に関する事細かな解釈が説かれ、その話に辟易していたようだ。主イエスのご自分の実存をかけ、分かり易く、神の恵みが見えるように説教された。人々はその言葉に力強さと権威を感じたのである。容易に想像できる。

会堂に、汚れた霊に取りつかれた男がいた。当時は、汚れた霊と清い霊とが入り混じって人間を支配していると考えられていた。汚れた霊は人を苦しめ、日常生活を困難にさせていた。今日で言えば、精神的な病と理解してよいであろう。この男が主イエスを見て、大声で「ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と叫んだ。福音書は興味深い記述をしている。普通の人々は、主イエスが誰であるか分からないが、汚れた霊に取りつかれた人は一目で、主イエスを「神の聖者だ」と見抜いている。自分は立派で正しく、一角の人間であると思っている人はおそらく神を問うことはしないだろう。人生に行き詰まり、挫折と絶望の中で神を求め、そこで神に出会うことができる。汚れた霊に取りつかれ、神から最も遠い人が主イエスに「聖なる者」を見る。この逆説が宗教の真理ではないか。

主イエスは、男に「黙れ。この人から出て行け」と宣言された。すると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。悪霊から解放されたのである。人々は皆驚いて「この言葉はいったい何だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じると、出て行くとは」と互いに言い合った。主イエスのうわさは、辺り一帯に広まったという。

悪霊追放の奇跡は極めて現代的なメッセージを持っている。悪霊とは神でない地上の諸々の力である。その力があたかも神であるかのように心と体の全てを支配する状況を悪霊に取りつかれたというのである。お金が、権力が、科学が絶対的なことであると思う人はそれらの奴隷になり、正気を失う。現代は、これらの病に取りつかれ、混乱と悲劇を生んでいるのではないか。聖書は神だけが神であり、地上の諸々はそれなりの意味と力を持っているが、相対的なものであると告げる。究極の神だけを神と認める時、究極以前の諸々の力を相対化する解放が得られる。

私は「うつ病」に取りつかれた。落ち込み、全てを否定的に見る虚無には甘美さがあり、埋没してしまう。これから抜け出したいと、もちろん投薬も受けた。苦悩の中で、主イエスの十字架と復活に、私を「よし」としてくださる神を見出し、あるがままの自分を受け入れた。神信仰が悪霊から解放し、肯定的な「生」を約束するのである。